

2026年度 C日程

教育学部・人間科学部

現代の国語、言語文化

〈近代以降の文章〉

注 意

- 開始の指示があるまで、この問題冊子を開かないでください。
- 机上には、受験票、黒鉛筆、消しゴム、時計以外のものを置かないでください。
- 受験票と机の上に貼ってある受験番号が同じかどうか確認し、問題冊子と解答用紙のすべてに受験番号と氏名を記入してください。
- 解答は、すべて解答用紙に記入してください。
- 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を高く挙げて監督者に知らせてください。
- 不正行為について
 - 不正行為に対しては厳正に対処します。
 - 不正行為に見えるような行動が見受けられた場合は、監督者が注意をします。
 - 不正行為を行った場合は、直ちに受験を取りやめさせます。
- 試験終了後、この問題冊子を持ち帰ってください。

受 験 番 号	氏 名

問題は **一** から **三** までで、一ページから十七ページまであります。確かめなさい。

解答は解答欄 **1** から **24** までにマークしなさい。

一 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

集団における利己的な振る舞いが、どのような結末を招くのかを考えるにあたって、「共有地^アの悲劇」と呼ばれる現象があります。ある村に共有の牧草地があり、村人が羊を放牧していたとします。ひとりの村人が羊の数を増やせばより儲かることに気がつき、本来二頭までのところ一〇頭に増やします。するとほかの村人も羊を次々と増やしてしまい、最終的には牧草地の草が食べ尽くされ、荒廃してしまうのです。

環境問題においても同じことが起こります。温室効果ガスを抑制して地球温暖化を止めようと合意を形成しても、どこかの国がそれを守らずに環境破壊しながら利益を得ていけば、他国もそれに追従します。最終的には、地球温暖化がより進行し、結果として誰も地球に住めなくなるでしょう。

自分の利益だけを考えて行動すると、社会にとって望ましくない状態になることを、社会的ジレンマと呼びます。市場や政治とは真逆で、自分の利益を追求すると、集団全体が悪くなる状況もあるのです。

公共財ゲームという、「共有地の悲劇」を再現したゲームがあります。

四人を集めて、ゲームの初めにお金を均等に配ります。そこからは、ワシラウンドごとに公共財にお金を出すかどうかを決めていきます。手持ち

のお金として残してもいいのですが、公共財に出資したお金は何倍かに増やされて、参加者に均等に分配されます。

集団全体の利益を最大化するためには、全員が出資する、つまり集団に協力すべきです。参加者に一〇〇円ずつ配られ、全員が出資すれば公共財は四〇〇円となります。出資したお金が二倍になって八〇〇円。均等に分配すれば、一人二〇〇円が戻ってきます。

一方、個人の利益を最大化するには、自分だけがお金を出さなければいいことになります。一〇〇円を三人が出資し、三〇〇円。二倍になって六〇〇円で、一人当たりの配分は一五〇円。手持ちの百円と合わせて二五〇円です。このように、他人の協力にただ乗りするフリーライダーが現れると、ほかの参加者も協力する気を無くし、公共財への出資金がゼロに近づいていくという悲劇を迎えます。

日常のなかでは、文化祭で手を抜く人がこれに近いでしょう。また、サッカーの授業前、サッカーゴールを運ぶときに、運ぶふりをして手を添えているだけの人、いませんか？ それでもサッカーゴールは運べますが、重さはほかのメンバーだけで負担することになってしまいます。

サッカーゴール運びで手を添えているだけの人がいたら、先生にいつけるのが妥当でしょう。要は罰を与えるのです。

さて、協力しない人に罰を与えるというのを、公共財ゲームで再現するとうなるでしょうか。

各ラウンドが終わるごとに誰がいくら出資したかを明らかにし、自分が支払う金額の四倍を、払っていない人から没収できる罰制度を設けます。罰を与えるひとは、「五〇円払うから、この人の二〇〇円を没収してくだ

さい」と申告できるのです。すると、フリーライダーが減って、協力金が増えていきます。罰には、集団の協力を促す機能があるのです。

ところで、罰を与える側は、自身も五〇円支払っています。このように、集団への協力を促し、相手に損（痛み、苦しみ、損害）を与えるために、自分もコストを払う行為を、「利他罰」「向社会処罰」と呼びます。

罰にはコストがかかるのです。このような道徳的な罰には金銭の損失がなかったとしても、コストがかかります。たとえば、カンニングをした人を告発したら、その相手に逆恨みされるかもしれません。

「利他罰」「向社会処罰」を与える側のモチベーションは、理性というより感情からきています。私たちは、ルールを守らない人を見ると怒りを感じるようにできているのです。

このような道徳感情は、約二万年の間、人類が小さな群れで暮らしていた狩猟採集時代に培われたものだといわれています。集団に協力したほうが生き残りやすい時代、道徳感情をそれぞれがインプットすることによって、集団のルールを維持してきた、その進化の過程のなごりです。

また、罰を与えた側は、罰を与えられた側が苦しむ姿に、快感や喜びを覚えるという、脳科学の研究結果も出ています。皮肉なことに、反社会的な悪意である、シャーデンフロイデや、カントの^{注1}いう「復讐欲」^{注2}にも近似しています。一八〜一九世紀を生きたカントは、脳科学がまだない時代に、人間を観察していくなかで、他人の苦しみを喜ぶ人間の本性を洞察していたのです。

このゲームをさまざまな国で実施したところ、最初から最後まで出資額が高い地域もあれば、フリーライダーに罰を与えられるようになると出資

額が高まる地域、そして出資額が最初から最後まで低い地域もありました。

興味深いことに、最初から最後まで出資額が低い地域では、多くのお金を出資した協力的な参加者に罰が与えられる傾向がありました。これは、罰を受けたフリーライダーが逆襲して罰を与えるパターンだけでなく、出資金が少なかった参加者が、気前よくお金を出した参加者に罰を与えるケースもあったのです。そんな地域では出資金は増えようありません。このような、^イ集団をバラバラにするような罰を「反社会的処罰」といいます。

「反社会的処罰」の背景には、行動経済学における「善人ぶる者への蔑視」という感情があります。気前のいい「善人」を見て、「あいつ、むかつくわ」と罰を与える。放課後に文化祭の自主練をしようと呼びかける、熱心な学級委員長が往々にしてほかのクラスメイトから嫌われてしまうのも、同じ現象です。

自分も損をしながら他人にも損をさせて、集団をバラバラにしてしまうのは「反社会的処罰」だけではありません。集団に利益をもたらそうとする「利他罰」「向社会処罰」も悪意に転じてしまうことがあります。

部族主義といわれているものがあります。先ほども似たようなことを述べましたが、私たちの脳には、狩猟採集時代に小さな群れで暮らしていたころの感覚がインプットされているのです。この部族主義的な本能は、現代社会における人間心理に、悪影響を及ぼしていることがまます。

人間は、われわれ（内集団）とあいつら（外集団）の差に敏感で、この差を広げるために、自分が損をしても相手にもっと損させようとする傾向があります。限られた土地における、熾烈な A の奪い合いです。部族主義的な本能は、性別や出身地だけではなく、クラス分けなどの機

械的に振り分けられた集団でも見られます。これがいい方向に作用することもあり、たとえば、体育祭のリレー競争に向けて「B組に負けずに頑張ろう」と一致団結して自主練できたら、みんなの足が速くなってウインウインです。しかし悪い方向に作用した場合「B組のエースを怪我させればいいじゃないか」と考える人が出てきます。これは極端な話ではありません。実際に、アメフト強豪の大学のコーチが、相手チームのエースに無理やりタックルして怪我^{けが}させるよう選手に指示を出したことがわかり、大問題になった出来事がありました。

とくに問題なのは異なる「道徳部族」による対立です。同じ道徳的な価値観を共有する集団を道徳部族と呼びます。道徳部族内だと「利他罰」「向社会処罰」はうまく機能します。しかし、集団ごとに異なる価値観を人間はもっています。例として、ヒンズー教では牛は神聖な生き物ですが、日本では好んで食べられます。ある集団では美德であることが、ある集団では悪徳であり、その反対もあり得るのです。異なる道徳部族の言動を見て、よかれと思って罰を加えると、激しい対立が生まれ、悪意に結びつき、最悪の場合は戦争になります。

一例としてアメリカでは、カトリックの立場から人工中絶に反対する共和党と、人工中絶を女性の権利として認める民主党との間で対立が続いています。

いまの社会には政治への不信感、何をやっても変わらないという無力感が充満しています。その一方で、他人を殺したり、自分を殺したりする暴力によって社会が大きく動くことがあります。(中略)かつては政治のかわりに戦争がありました。しかしそれではいけないから、言葉や選挙で社

会の方針を決める民主主義の世の中になってきたのです。しかしまた、人命の犠牲によって社会が動いています。

^{注3} チートやハックで個人が生き延びる道を目指すべきなのか。チートやハックができないなら、社会への復讐として暴力を引き起こすしかないのか。考えずにはいられません。社会から疎外されている人々に見て見ぬふりをし続けると、B。そうなる前に社会福祉や援助が必要で、もっと政治が頑張らないといけません。しかしそれには、人間に備わる「善人ぶる者への蔑視」という現象が妨げになるでしょう。

答えの出ない問題ですが、^ウ悪意との付き合い方を探ると、社会をいい方向に変えるためのヒントが見つかるかもしれません。

(綿野恵太「他人の幸せを道連れにする悪意について考える」による)

注1 シャーデンフロイデ：他人の不幸に対する喜びや快感。

注2 カント：(一七二四―一八〇四)プロイセンの哲学者。

注3 チートやハック：コンピューターやゲームで用いられる不正行為に関連する言葉。ズルや不正な割り込みのこと。

1 傍線部ア「共有地の悲劇」の説明として最も適切なものを、次の

① ～ ⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 複数の人間によって共有されている土地の資源が、自然災害など外的要因によって突発的に失われ、所有者全員の財産が大きく損なわれるような事態を指す。

② 個人が目先の利益を追求して共同資源を過剰利用し、その結果として共有されていたはずの資源が枯渇し、所有者全体の利益が大きく損なわれる事態を指す。

③ 村人が共有する資源から得られた利益は平等に分け合うという取り決めに事前にしなかったが故に、後になってから村人の間でいさかいが生じた状態を指す。

④ 共有地を共同管理している村人同士が、それぞれの利益を最大化できるように共有資源を利用した結果、個々の能力によって収益に違いが生じた状態を指す。

⑤ 共有地の有効活用に対して、ある村人が協力を拒否し、その結果として、他の利用者の得られたであろう収益が侵害され、共有地の価値が暴落した事態を指す。

2 傍線部イ「集団をバラバラにするような罰を「反社会的処罰」といいます」とあるが、「反社会的処罰」が生じる仕組みの説明として最も適切なものを、次の① ～ ⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 協力的な人が集団内の資源分配において過剰に利益を得るよう制度的に優遇されている場合、その状況によって損を感じた人が経済的合理性に基づいて協力を罰する傾向が生じる。

② 理性的に行動する協力的な人を、感情的なフリーライダーは外集団として敵視する。その結果、協力的な行動を外集団への利益供与と誤認し、裏切り者として罰する動機が働く。

③ 個人が協力的に振る舞うと、集団内で相対的に評価が高まり、地位や発言力が増す場合がある。それを脅威と感じた者が、自分の地位低下を防ぐために協力を罰する行動に出る。

④ 協力的な人の行動が集団の利益に貢献していることに気づかない人は、協力を不公平なものと捉え、自分だけが損をしていると感じる。その結果、協力的な人を罰する傾向が強まる。

⑤ 協力的な行動が集団全体の利益を高めた場合、合理的な理由で罰を受けた者や、協力的な人に劣等感を抱いた者が、嫉妬や対抗心といった感情的要因で協力を罰しようとする。

3 空欄

A

に当てはまる慣用的な表現として最も適切なものを、

次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① パイ

② 金

③ 駒

④ パン

⑤ 命

4 空欄

B

に当てはまる表現として最も適切なものを、次の

①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 社会から疎外されている人はいなくなります

② 善人への蔑視が加速し国が分断します

③ チートやハックが終息に向かっていきます

④ 社会への復讐としての事件が起きます

⑤ 社会福祉や援助が行き渡るようになります

5

傍線部ウ「悪意との付き合い方を探る」とあるが、付き合い方を探る

目的として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 人間の悪意や理不尽な処罰感情、善人ぶる者への蔑視といった心理的背景を理解することで、社会をより良い方向へと変えていくための具体的なヒントを得るため。

② 悪意の基盤となる部族主義的本能の理解とその本能への対処法を探ることで、道徳部族による対立によって発生する武力紛争や戦争を少しでも減らすため。

③ 部族主義的本能の出発点となる利他罰や向社会処罰について理解すること、その発動頻度を減らし、集団全体のより良い協力行動を自発的に促すためのヒントを得るため。

④ 社会の中に満ちあふれている悪意を理解し、善人ぶる者への蔑視を意図的に強化することで、集団内部の序列や秩序を適正に維持し、社会をより良い方向へと変えるため。

⑤ 内集団の外集団に対する悪意との付き合い方を探ることで、悪影響を与える部族主義の本能を再確認し、適切な外集団との関係構築や競争に勝利するための団結を促すため。

⑥ 本文における表現上の工夫として最も適切なものを、次の①～

⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 専門的な用語や概念を極力使わず、話し言葉の語り口にすることで、学術的な厳密さよりも親しみやすさを優先している。

② 過剰な感情表現を避け、現実にかきた痛ましいニュースを踏まえながら、主張の客観性を最優先した論述になっている。

③ 対立する事象や考えを各段落ごとに並列的に示すことで、議論が多層的に深みを増していくように構成している。

④ 専門用語を提示する前後に平易な言葉で説明したり、日常的な比喩を挟むことで、内容理解を助けようとしている。

⑤ 淡々と事例を列挙しながら、読者ができるだけ自分の生活に関連づけられるように工夫して親近感を高めている。

⑦ 本文全体の論の展開として最も適切なものを、次の①～⑤の中から

一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 冒頭で利己的な悪意の存在を肯定し、その上で協力の重要性を強調することで、悪意を受け入れることの大切さに結論づける構成。

② 現代における部族主義の危険性を論じた後、多様性社会の構築のために全ての罰行動を排除するべきだと暗に結論づける構成。

③ 悪意や罰の心理的背景を紹介し、その多面的な作用を具体例とともに検討することで、社会改善への示唆で締めくくる構成。

④ 公共財ゲームのルール説明を中心に据え、その結果を用いた現実社会の行動原理の解説と、原理を応用した社会改善を示唆する構成。

⑤ 善人ぶる者への蔑視という現象を中核的なテーマとして深掘りし、フリーライダーの救済こそが社会改善には必要だと主張する構成。

二

次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

大親友だった祖母を、わたしは小学校入学の数週間前に亡くした。

亡くなる少し前から、祖母は田舎の伯父の家に戻っていたのだと母は言う。そうでなければ、わたしの家で祖母の入院やら、葬式やらの面倒を見たことになるわけで、たしかに、そんなことをした覚えはない。

けれど、祖母がいらないのなら、両親が仕事に出かけた家で自分が何をしていたのがよくわからない。団地のほかの家に預けられたりしたら、わたしは大騒ぎしただろうし、母が病院の勤務を休んでまで、わたしといっしょにいたということもないはずだ。

一度、母に問い合わせてみたことはあるのだが、どうしたんだったかしらねえ、ともかくなんとかしたのよ、とかなんとか、適当なことを言われて、きちんとした答えが返ってこなかった。

葬式は、田舎の家で行われた。

あの葬列も、いまはなかなかもう見られない。死んだ者の血縁者で、年長の者から順番に持ち物を決めて、喪主である伯父が位牌いははを持ち、四男のわたしの父がお骨を首から下げて、ほかの人が、お団子やらお花やら、七夕を思わせるような色とりどりの飾り、松明たいまつ、いろいろな物を持って、お墓まで練り歩くようにして行ったのを覚えている。

葬列の前のほうは男性ばかりで、親族の女性は葬列の一番後ろからついていく。わたしは母に手を引かれて、わけもわからず葬列の最後に加わった。あのころの田舎の道は、まだアスファルトで舗装されていなくて、春の生暖かい風が土埃つちぼりを舞い上げる中を、ぞろぞろと連なって歩いて行った。

北関東の田舎のことで、青麦がそよぐあぜ道を抜けて、雑木林を背負った大きなお寺にたどり着いた光景が、脳裏にかすかに残るような気がするのも、後になって葬儀の写真を見せられたからかもしれない。

祖母が「ぱっと」消えたのかどうか、わたしは知らない。祖母の死生観が果たして何を射ているのかどうかも、よくわからない。祖母は来世を信じていないようだったが、わたしはどこかで信じている。

この世に存在したことがある人々が、それぞれにいちばん好きな姿で、いちばん好きな人たちと、和やかな来世を送るようなことを想像してみられるけれど、そうした想像じたいが、死者ではなく生者であるわたしによる創作である以上、祖母の言う、

「^アびっと、^アここんところに入る」

ということなのかもしれない。

少なくとも祖母は、わたしの胸に入り込み、そのままずっと出て行かずにここにいる。いまとなるとときどきしか思い出さなければ、「ここんところ」から出ていなくなってしまうことは一度もない。

藍色の^{注1}アッパッパを着て、素足に下駄げたを履いて、白い髪をお団子にまとめた祖母が、ずっとわたしの胸の中にいる。

ところでなぜ祖母の話をしたかといえば、わたしが団地から外に出ていくことに^イずっと恐怖感を抱いていたことと関係がある。まるで長い長い前置きを書いたようなことになっているけれども、厳密には前置きというわけでもないからかまわないだろう。

小さいわたしにとって、団地を出るのは恐怖だった。しかし、団地の中にいることすら、安心はできなかった。つまり、団地の個々の家はそっく

りの形をしていて、どこにも似たような家族が暮らしていて、いつ、わたしの家族と入れ替わってしまうかわからない。両親と祖母のいる、あの小さな3LDKが、わたしの唯一の安心できる場所であり、それ以外のところへは恐ろしくて行けなかった。幼稚園すら、一日で退園した。これがわたしの幼少期である。

両親といっしょなら、あるいは祖母といっしょなら、バスにも乗れたし、電車で出かけることもできた。しかし、家族と離れて独りでどこかへ行くなんて、考えただけで恐ろしいことだった。

そのわたしが、小学校に入学する羽目に陥るのである。

事前にいろいろなことを、言いかさされてはいたに違いない。しかし、巣穴の中の定位置のような3LDKを出て、家族とも離れて、得体の知れない集団生活に入ることなど、当時のわたしには想像を絶する恐怖だったと思われる。

入学式には、母ばかりではなく父も会社を休み、両親に両手を取られてつりさげられるようにして出かけた。

翌日からは、集団登校といって、団地の一角に同じ小学校に通う児童が集まって、六年生をリーダーに徒歩で学校へ出かけることになっていたが、足が震えて昏倒し^{注2}そうになっているわたしを、困った班仲間は置き去りにして行ってしまった。半日だけ休みを取って、わたしの様子を見ていた母は、困惑しながら小学校に送り届けたが、母の姿が見えなくなると、わたしは恐怖で叫びだし、一年生の教室を妨害した。

わたしは最初の数週間を登校拒否して過ごした。両親の出かけた家で、家から一歩も出ずに過ごしたのだ。母方の祖母が呼ばれてきたり、母の妹

が世話にやってきましたりした。家にさえいられれば、一人にしておいてもさほど問題がないことがわかって、食事やおやつを用意して出かけた母が帰るまで、一人で過ごしたこともある。

ずっとそのままにしているわけにもいかなないので、少し落ち着いてから母がなんとか職場の都合をつけて毎日登校につきあい、下校時に迎えに来るという方法をしばらく続けることになった。小学校に入れたら、放課後は学童保育で面倒を見てもらえば仕事を続けられると思っていた母は窮地に陥った。

いくつかの方法が試行錯誤されたが、わたしの中の恐怖は去らず、母はもう仕事を辞めるしかないと思ったのだという。

ある日、学校の帰りに母はわたしといっしょに喫茶店に立ち寄った。ランドセルを背負った子どもと放課後にコーヒーを飲みに行くなんてことは、あまり勧められることでもなさそうだけれど、母はよほど疲れていたのだらう。

ちりんちりと、ドアについた鈴が鳴った。

カウンターの下のマスターが顔を上げた。

「お好きのところへどうぞ」

と、マスターが言った。

母はわたしを促して、窓際の席に腰掛けた。

わたしは母の正面には腰を掛けずに、まっすぐ部屋の隅の赤い樽^{注3}に向かった。

「こっちに來て。ちよろちよろしないで」

母は言った。

「いいんですよ。あそこ、気に入ってるから」

カップをリネンで拭きながらマスターが言った。

母はヘンな顔をした。そして、黙って自分にはコーヒーを、わたしにはオレンジジュースを注文した。

「ホットミルクもできますよ」

と、マスターが言った。

「ホットミルクがいい」

と、わたしは注文した。

「あいよ」

と、マスターが言った。

母は、今度こそ、異様なものを見るような目つきで、わたしとマスターを交互に見つめた。そして、

「あんた、ここに来たことがあるの？」

「おばあちゃんとね」

こともなげに、マスターは言った。

「おばあちゃん？」

わたしは樽の中に腰掛けて、ゆっくりうなずいた。しかし、母にはその姿が見えなかったのだろう。彼女は^{おまた}大腿で歩いてやってきて、樽の中を覗^{のぞ}き込んだ。

「あんた、おばあちゃんと来たの？」

「しばらくみえないんで、どうしたかなと思ってたんですよ」

マスターが代わりに答えた。

母はぐるんと振り返った。

「義母^{はは}は、先日、他界しました」

と、母は言った。

マスターは困ったように口を開けて、何かぼんやりしていたが、やがて落着きを取り戻して、

「やあ、それは。ご愁傷さまでした」

とだけ言った。

「なんだよう、ばあさん、死んじゃったのかい」

スポーツ紙に目を落としていた老小説家が目を上げた。ぞんざいな言葉の割には、大きなショックを受けているようだった。

ちりんちりと鈴を鳴らして、神主と歌舞伎役者が入ってきた。

「おう、聞いたかい。タタンのばあさんが死んじゃったんだってよ」

老小説家が言った。

「え？ チビちゃんのおばあちゃまが？」

神主はいったん座った腰をびくりして上げるほど驚いて、

「あら、いつ？」

と、誰にともなく訊ねた。

「ちよつと前です。三月の頭です」

戸惑いながら、母は答えた。次から次へと現れる男たちが、みんなして祖母を知っていることに、^エたいへんな衝撃を受けたらしい。

「お悔^{くや}み申し上げます。そりゃ、知らなかったなあ」

^{注4}鉢^{ハチ}の開いた頭をした、ちよつと見てくれのいい若い男までが、そう言つて母に頭を下げるのだった。

わたしは久々に来た店で、すっかりリラックスして樽の中に座っていた。

ほんとうにどうしてだかさっぱりわからないのだが、わたしはこの店の赤い櫓の中にいれば、団地の中の自分の家にいるのと同じくらい安心できた。初めて祖母と二人で店に足を踏み入れたときから、不思議に落ち着かせてくれる空気が存在したのだ。

祖母は、

「体がなまるから、散歩だ」

と言つては、腰に手をあててゆっくりゆっくり、どこへでも行つた。団地の敷地を出て、わたしの手を引いて横断歩道を渡り、ニンジン畑の間の道を行つて坂を下つて、煙草屋^{たばこや}の先にこの店を見つけたときは、悪戯^{いたずら}を思いついたような顔をして、

「入つてみるか」

と、わたしに笑いかけた。

生涯のほとんどを田舎で過ごした七十代の祖母が、喫茶店に入つてコーヒーを注文する姿を思い出すと、やはり奇妙な気持ちになる。けれども、あのころわたしはまだ小さかったし、明治生まれ、田舎育ちのおばあさんが、コーヒーを飲むのが似合わないなんてことを考えるだけの予備知識もなかった。

それに、いくら明治生まれとはいえ、彼女なりに戦後の日本を生きており、コーヒーにも紅茶にも馴染^{なじ}んでいたとしても、なんらおかしいこともないはずだ。祖母はしげしげメニューを見つめ、自分のためにブレンドコーヒー、わたしにはホットミルクを注文した。ホットミルクというものを、わたしはこの店で初めて飲んだのだと思う。

「砂糖をちょっと入れると、うんまいんだ」

小さな声で言つて、祖母は少し震える手で、ホットミルクにグラニュー糖を入れて混ぜてくれた。甘いホットミルクはたいへん美味^{おい}しかった。

店には独特の風貌の、変わった人たちがいたけれども、そのころは彼らが変わつているとすら思わなかった。祖母は誰とでも愛想よく接していた。ただ、方言でしゃべるのが恥ずかしかったのか、ほとんど言葉を発することなく、笑顔でうなずいたり、

「へえ」

とも、

「ええ」

とも聞こえる相槌^{あいづち}を打つたりしていた。店の常連たちは、祖母と特別に話があるというわけではなく、それぞれ勝手に言いたいことを言つて、帰つていくような連中だったから、祖母が話そうと話すまいととくに気にもかけなかった。ただ、優しい、愛想のいい笑顔を向けてくれる老婆のことが、嫌いではなかったらしい。いつのまにか、祖母は店の仲間の一人になつていたのであった。

なぜ、わたしがあの店に居着いてしまったのかは、いまだにわからない。祖母といつしよに行つたその最初の日から、特別な店だったというのも間違ひではないと思う。それでも、たった一人でそこに行くことが平気になるほどに、店を自分の陣地のように思い始めたのはなぜなのだろう。

キ
「あんた、ここにいても発作は起きないの?」

コーヒーを飲みながら、母がわたしに訊ねた。発作というのは、べつに病氣でもなんでもなくて、わたしが学校で恐怖に駆られて叫びだしたことを指す。たびたび、わたしは恐怖にとりつかれて、唐突に落ち着きをなく

すことがあったのだ。

樽の中で、わたしは首を上下に振った。

母は、何か考えるような目をして、カップに再び口をつけた。

母は結局、勤めていた病院を辞めて、わたしのそばにすることにした。でも、わたしを学校に送り、また迎えに行く日々の中で、なにがしか戦略を練ったのだと思われる。わたし自身も、集団生活に慣れるにつれ、学校は叫びだすほどの恐ろしいところだとは思わなくなっていたし、団地の数ある3LDKから我が家をえり分けるのがさほど難しいことだとも思えなくなっていた。

そして、あるとき、母は別の病院に仕事を見つけてきたのだった。母が家にいたのがどれくらいの期間だったのか、わたしにはもう思い出せない。気がついたときは、集団登校で学校に行き、帰りは一人で喫茶店に駆け込む毎日を送っていた。

一つだけ、思いあたることがある。喫茶店に行くとき、あるいは学校に行くときでさえ、わたしは一人ではないと思えるようになっていた。それは、とりもなおさず、祖母が死んだからである。

祖母自身は、電気が消えるように命の炎を消したのかもしれないが、たしかにわたしの心の中に入り込んだ。わたしは心の中の祖母と会話することを覚えた。

祖母は、わたしが生涯で初めて持った死者だった。死者の思い出が生者の生を豊かにすることを、わたしは祖母を亡くしたとき初めて知ったのだ。

(中島京子「ぱっと消えてぴっと入る」による)

注1 アップパッパ：大正期から大阪で売り出された、女性の夏用の

大きめのゆつたりとした木綿製のワンピースのこと。名称は近畿地方の俗語で、西欧で流行したマザーハバードドレスがなまったものとの説もある。

注2 昏倒：めまいがして倒れること。

注3 赤い樽：古くからお酒などの貯蔵に用いられた、木製で胴が膨らんでいる円筒形の容器のこと。ここではコーヒード豆を入っていた樽を喫茶店の装飾用に手入れをして赤いペンキを塗った樽をさす。

注4 鉢の開いた頭：「鉢」とは頭頂部をさし、鉢が平らで角張っている頭の形をさす。

8 傍線部ア「びっと、ここんところに入る」とあるが、それはどういうことか。最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 亡くなくても現世に執着を残した祖母は私の中に入り込んで、生前叶^{かな}わなかった夢を体現しようとするということ。

② 祖母は亡くなった後も私を心配して心の中に入り込み、私が出て行ってほしくてもそれは無理だということ。

③ 亡くなった祖母の魂が生きている私の胸に入り込んで、思い出さなくても心の中から出ていくことはないということ。

④ 祖母は亡くなった後も、生きている者に生前の苦しみや悲しみをわかつてほしいと私の胸に入り込んでくるということ。

⑤ 身は滅んでも亡くなった祖母の魂は生き続け、現世をさ迷って悩み苦しむ弱者の心の内に入り込んでくるということ。

9 傍線部イ「ずっと恐怖感を抱いていた」とあるが、わたしが抱いていた恐怖感とは何か。最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 幼稚園や小学校でいじめを受けていて、それを両親や祖母にうまく説明できずに隠しつづけていることが恐ろしかったという感覚。

② 両親と祖母と暮らしていた団地の自宅が私にとっては安住の地であり、そこから一人で外に出ることは恐ろしかったという感覚。

③ 団地は個々に異質な家族が暮らしていて、いつかわたしの家族と入れ替わるかもしれないことが恐ろしかったという感覚。

④ 両親や祖母と一緒にあっても、団地以外の外の世界は大きな知らないモノに襲われる場所のように思えて恐ろしかったという感覚。

⑤ 外出した時の恐ろしい体験があり、一人で自宅にいることも家族で外出することも恐ろしくて出来なくなってしまうたという感覚。

10 空欄

ウ

 に入るものとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 腹から絞り出すような

② 重々しく柔らかな

③ 抑揚のないうつろな

④ 夢見心地のか細い

⑤ 店内に響くような

11 傍線部Ⅰ「たいへんな衝撃を受けたらしい」とあるが、なぜ母は衝撃を受けたのか。その理由として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 自分にはいつも厳格であつた義母が内緒で孫を連れまわし、おしゃれな喫茶店に出入りさせていたことに驚いたから。
- ② 都会的な義母がおしゃれな喫茶店に嫁の自分ではなく孫を連れていき、密かに楽しんでいたことに驚いたから。
- ③ 勝気な娘の育て方に思い悩んでいたが、義母はそれを察して孫を外の世界に触れさせてくれていたことに驚いたから。
- ④ 生活が困窮していたにもかかわらず、敷居の高い喫茶店で高価なコーヒーを孫と二人でこっそりと飲んでいた義母に驚いたから。
- ⑤ 喫茶店のマスターをはじめ、お客さんの誰もが義母と娘のことを認識していて、自分の知らない義母と娘の世界に驚いたから。

12 傍線部オ「悪戯を思いついたような顔」とあるが、その解釈として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 祖母は高齢であり、体のためには散歩が必要であつたが、それにとっても退屈していて、ちょうど休憩に都合のいい喫茶店を見つけて嬉しい様子であつたということ。
- ② 祖母は死期を自覚し、残り少ない人生において孫に何か残してやれるものはないかと常に考えていて、ちょうど喫茶店を見つけて自身の経験談を語ろうと思つていたということ。

③ 祖母は、都会の変わらない平凡な日常に嫌気がさしていて、孫との散歩で少し人の道にはずれたことをしてみようかと喫茶店に入ることを思い立ったということ。

④ 田舎から出てきた祖母が、散歩で見つけたおしゃれな喫茶店に入ることは、新しい外の世界へのちょっとした冒険にさりげなく孫をいざなうような遊び心であつたということ。

⑤ いつもつまらなそうに家にひきこもっている孫をなんとか外へ連れ出して、通い慣れたなじみの喫茶店へ連れて行き、コーヒーというおしゃれな飲み物で驚かせようと思つたということ。

13 傍線部力「やはり奇妙な気持ちになる」とあるが、その解釈として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 田舎者だと思っていた祖母が、突然見慣れないおしゃれな喫茶店に入ってコーヒーを飲んでる姿が、今となってわたしには目新しく不思議に思えたということ。

② 祖母は田舎育ちであったが、明治生まれの女性であり、文明開花の最盛期を熟知していることを改めて目の当たりにして、尊敬の念を深めたということ。

③ 祖母は七十年以上も生きてきた人生の師匠であり、様々な経験を経て、喫茶店という初めてのおしゃれな場所にもすぐになじんでいて驚嘆したということ。

④ いつもゆったりと歩く祖母の姿と、おしゃれな喫茶店で緊張もせずにコーヒーを注文する祖母の姿という二面性を見て、その不可解な様子に近寄り難さを感じたということ。

⑤ 喫茶店でコーヒーを注文する祖母の姿はわたしにとっては日常の一部であり、そうした小粋な祖母の一貫した姿が不思議と私を安心させたということ。

14 傍線部キ「あんだ、ここにいっても発作は起きないの？」とあるが、なぜ、わたしは喫茶店にいと発作が起きないのか。その解釈として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 祖母はわたしが初めて持った死者であり、その祖母との思い出の中で一番衝撃的であったのが喫茶店に一緒に通ったことであった。その特異な一瞬の出来事がわたしを強くしたから。

② 西洋風の喫茶店はわたしにとって排他的な場所であった。祖母はそうした場所にわざと連れていくことによって、人生の過酷さを自覚させ、わたしを日常の世界へと引き戻してくれたから。

③ 喫茶店はわたしにとって、自宅と同様に安らげる場所であった。誰でもありのままの自分を受け入れてくれるような空間がそこには広がっていて、祖母と来た最初から心地のよいものであったから。

④ わたしにとっての唯一の逃げ場所が喫茶店であった。祖母は日常的な両親の束縛や生きづらさから解放してくれる存在であり、その祖母という非日常の存在が私を慰めてくれたから。

⑤ 祖母はわたしが外の世界へ出ることの恐怖をよく理解してくれていた。なじみの喫茶店へ連れて行き、自信に満ちた自分の姿を見せることで、外の美しい世界を教えてくれたから。

三

次のA～Cそれぞれの設問に答えなさい。

A

15～18の各文の傍線部のカタカナを漢字に改めたとき、それと同じ漢字を傍線部のカタカナに含むものを、それぞれ後の①～⑤の中から一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

15

寄付金をフンパツした。

- ① 彼の会社はフンシヨク決算を指摘された。
- ② 不正にフンガイの声を上げる。
- ③ 人々の不満がフンシユツした。
- ④ 国境を巡る議論がフンソウに発展した。
- ⑤ 彼の獅子フンジンの活躍に目を見張った。

16

彼はシセイを正して師の言葉を聞いた。

- ① 国家のシサクを誤ってはならない。
- ② 決勝点を奪った主将のユウシ。
- ③ 三回目のシギで完璧な演技を披露した。
- ④ シユウを決する争い。
- ⑤ 議事のシサイについて知らせる。

17

カンケンによれば彼の発見には前例がない。

- ① カンイ包装に切り替える。
- ② 西洋画をカンシヨウする。
- ③ カンリヨウ的な制度。
- ④ この件は私のカンカツ外だ。
- ⑤ カンダイな配慮に心から感謝する。

18

立場を離れてもインゼンたる勢力を持つ。

- ① その批評はいささかインケンだ。
- ② その判断はインシユウ的だ。
- ③ 選手からのインタイを表明する。
- ④ 重要書類をインサツする。
- ⑤ 証拠の品をイントクする。

B

19～22の各文の意味を持つ語句として最も適切なものを、それぞれ後の①～⑤の中から一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

19

目標達成のため、苦しい試練に耐えること

- ① 一喜一憂（いっきいちゆう）
- ② 千載一遇（せんざいいちぐう）
- ③ 臥薪嘗胆（がしんしょうたん）
- ④ 大器晚成（たいきばんせい）
- ⑤ 温故知新（おんこちしん）

20 表面上は従順に見せかけて、内心では反抗すること

- ① 羊頭狗肉（ようとうくにく）
- ② 面従腹背（めんじゅうふくはい）
- ③ 朝令暮改（ちようれいぼかい）
- ④ 粉骨碎身（ふんこつさいしん）
- ⑤ 外柔内剛（がいじゅうないこう）

21 周囲から孤立し、助けが得られない状況

- ① 四面楚歌（しめんそか）
- ② 暗中模索（あんちゅうもさく）
- ③ 五里霧中（ごりむちゅう）
- ④ 独立独歩（どくりつどっぽ）
- ⑤ 呉越同舟（ごえつどうしゅう）

22 他人の意見にすぐ同調してしまうこと

- ① 独断専行（どくだんせんこう）
- ② 暗中模索（あんちゅうもさく）
- ③ 馬耳東風（ばじどうふう）
- ④ 傍若無人（ぼうじゃくぶじん）
- ⑤ 附和雷同（ふわらいどう）

C 次の文章中の空欄 23・24 に当てはまるものとして最も適切なものを、それぞれの①～⑤の中から一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

青森出身で、戦後、新戯作派と呼ばれる作家グループの一人として活躍した 23 は、退廃的で自虐的な作風から「無頼派」とも称され、人間のおかしみや悲しみをユーモラスに描いた。代表作の一つである 24 は、戦争で没落していく貴族の生活と、その中で強く生きるヒロインを描いた小説である。

23

- ① 太宰治
- ② 坂口安吾
- ③ 堀辰雄
- ④ 中野重治
- ⑤ 吉行淳之介

24

- ① 桜の森の満開の下
- ② 歌の別れ
- ③ 斜陽
- ④ 夕暮れまで
- ⑤ 風立ちぬ

(以上で問題は終わりです。解答票の解答番号 25 以降は使用しません)